

《書評》

『戦争のかけらを集めて：
遠ざかる兵士たちと私たちの歴史実践』

清水亮*・白岩伸也**・角田燎編***、塚原真梨佳****ほか著、
図書出版みぎわ、2024年

井上義和†

人間は二度死ぬ、という。誰が最初に言ったのかオリジナルは不明だが、人口に膾炙したきっかけは永六輔の言葉のようである。すなわち永曰く「人間は二度死にます。まず死んだ時。それから忘れられた時」（『二度目の大往生』岩波新書、1995年、62頁）。ここで重要なのは後段の「忘れられた時」である。

本書は副題にある通り「遠ざかる兵士たちと私たち」の二者関係（の変容）を扱うが、私はこれを「忘れられた時＝二度目の死」という観点から捉え直してみたい。あるいは本書を手がかりに「戦死者において二度目の死はいつ訪れるか」という問いを考えてみたい。

*

上で二者関係と述べたが、厳密には三者関係である。すなわち「遠ざかる兵士＝戦死者」と「私たち」の間には「戦死者の生前の記憶をもつ者」としての戦友や遺族という媒介項が入る。戦死者が私たちの元から遠ざかるのは、この「戦死者の生前の記憶をもつ者」が年々減少し続けているからである。戦後80年が、10年ごとの節目という以上の意味をもつとすれば、この「戦死者の生前の記憶をもつ者」がこの世からいなくなる時代が本格的にやって来るといえる点にある。このとき、戦死者と「戦死者の生前の記憶をもたない私たち」の二者関係は決定的に変わらざるをえない。本書に集った11人の執筆陣と2人の出版人は、そのインパクトをきわめて真摯な態度で受け止めようとしている。だから企画のベースには「非体験者が担う戦友会という謎」があった（270頁）。

もちろん本書は唐突に出現したわけではなく、数年前から互いに呼応し合うような動きはあった。例えば筆頭編者の清水亮が編集を担当した『戦争社会学研究』第6巻（2022年）の特集「戦争体験継承の媒介者たち：ポスト体験時代の継承を考える」や、みずき書林の編集者・故岡田林太郎が手掛けた2冊の編著『なぜ戦争をえがくのか：戦争を知らない表現者たちの歴史実践』（大川史織編

* 慶應義塾大学環境情報学部専任講師

** 北海道教育大学旭川校准教授

*** 立命館大学立命館アジア・日本研究機構専門研究員

**** 立命館大学立命館アジア・日本研究機構専門研究員

† 帝京大学共通教育センター教授

inouey@main.teikyo-u.ac.jp

著、2021年）と『なぜ戦争体験を継承するのか：ポスト体験時代の歴史実践』（蘭信三ほか編、2021年）である。特集や書名に込められたキーワードを見れば、本書もこれらと近い問題意識から出発していることがわかる。

本書がこれらの類似企画から一步踏み出そうとしているのは、明晰な状況認識とそれにもとづく積極的な方法意識においてである。清水はプロローグで「『記憶』の時代は、三〇年以上も足踏みを続けている」（4頁、傍点引用者、以下同）と述べている。「記憶」の時代とは、非体験者が社会の大多数を占める1990年代以降を指す。この時代区分を2010年に提案した歴史学者の成田龍一は、2020年に至ってもその先の「歴史化」になかなか至らないと総括した。清水はこの「長すぎた記憶の時代」の問題意識を引き受けて、「『歴史』の時代を、座して待つことなく、能動的に呼び寄せて切り開こうとする意志」を表明する（5頁）。そして、歴史に向き合う自らの姿勢を「体験・記憶の継承」から「歴史実践」へと命名し直すのである（6頁）。

*

さて、戦死者の生前の記憶をもつ者がこの世からいなくなろうとしている。このことの意味を捉え直すために、少し迂回することをお許しいただきたい。

「忘れられた時＝二度目の死」をモチーフとした物語に、ディズニー配給の長編アニメ『リメンバー・ミー』（原題Coco、2017年公開）がある。この物語の背景にある「死者の国／生者の国」という世界観が大変示唆的なのである。死者はふだん「死者の国」で暮らしているが、年に一度、「死者の日」には「生者の国」に住む家族に会いに行ける。本作はメキシコが舞台とされているが、日本のお盆とよく似た設定は、私たちには馴染みやすい。

「死者の国」には厳しいルールが幾つもあるが、なかでも「忘れられた時＝二度目の死」に関係するものは次の2つである。すなわち、①「死者の日」に死者の魂が「生者の国」に渡ることができるには、生きている家族が自分の顔写真を祭壇に飾っていないとできない（その条件を満たさなければ出入国審査を通過できない）。②写真が祭壇に飾られない場合、「生者の国」で忘れられる（＝生前の記憶をもつ者がいなくなる）と死者の魂は「死者の国」からも完全消滅してしまう。

原題のCocoは主人公の少年ミゲルの曾祖母「ママ・ココ」から採られている。「死者の国」に入り込んだミゲルが出会った死者ヘクターが、じつはこの曾祖母の父親（ミゲルの高祖父）なのであるが、昔ある出来事がきっかけで彼の存在は家族内で否定され、家に残された写真からも顔の部分が破られていた。ヘクターは自分の顔写真を持ってはいるが、これが家族の祭壇に飾られないかぎり、自分の存在を支えるのは高齢となった娘ココ（Coco）の記憶だけである。しかしココは父親のことを忘れかけており、ヘクターの消滅は時間の問題である……という待ったなしの状況にミゲルが介入していく。

上記のルールのうち、①は写真の普及を前提とすれば時代が限定されてしまうが、死者の魂が宿る依り代という意味では日本の仏壇に置く位牌のようなものであろう。たとえ死者の生前の記憶をもつ者がこの世からいなくなっても、祭壇に写真（依り代）を飾ってお祀りするかぎり、死者の魂は「死者の国」で心穏やかに暮らし続け、年に一度の死者の日に実家の子孫に会いに来られるというわけだ。

ここまではよい。問題は②である。「生者の国」で忘れられたとき、「死者の国」の魂も消滅してしまう。物語では「忘れられた時＝第二の死」が恐ろしいこと、忌むべきことという否定的評価が前提で描かれている。現代日本においても「忘れない」は死者に対する誠意ある態度として繰り返

し強調されているから、「私を忘れないで」を意味する邦題をもつ本作品も、違和感なく受け入れられるだろう。

この物語の世界観を援用したときに、日本の民俗的な知恵と戦死者の問題はどのように捉えられるだろうか。

*

「人間は二度死ぬ」という言葉には本来、是非や善悪といった価値判断は含まれない。生者と死者の関係性は時間とともに自ずと変化する。諸行無常である。それ自体は否定されるべきものではない。むしろそうした自然の変化を前提として、死者の処遇を段階的に変えながら社会のなかに包摂する知恵がある（あった）はずである。

『リメンバー・ミー』はたしかに日本のお盆とよく似た設定であるが、死者の魂が「先祖」へと昇格する条件において差異がある。

日本の先祖祭祀においては、死後 33 年目（32 年後）となる 33 回忌を「弔い上げ」として個人を対象とした法要の区切りとする考え方がある。柳田國男『先祖の話』でも繰り返し言及される論点である。すなわち、「一定の年月を過ぎると、祖霊は個性を棄てて融合して一体になるものと認められていた」（51 節）、「それから後は人間の私多き個身を棄て去って、先祖という一つの力強い霊体に融け込み、自由に家のためまた国の公のために、活躍し得るものともとは考えていた」（57 節）。

いわば、個性あるホトケが、何らかのタイミングで、個性なきカミへと融合する。これは先祖代々の先祖と一体化することを意味する。33 回忌以外のタイミングも含めれば、日本各地で類似の儀礼がみられるので、先祖祭祀を持続可能なものにするために生み出した民俗的な知恵とみられる。時間の経過とともに写真（位牌）は増え続け、祭壇（仏壇）を圧迫し、いずれ整理・統合しなければならぬ。一世代（約 30 年）というのは老親を送った生者が、自分もまた送られる老齢になるまでの時間と考えると、合理的な設定である。

『リメンバー・ミー』ではこの整理・統合の段階が描かれていないが、日本を舞台にするなら、死者の魂は、個性あるホトケが暮らす「死者の国」からどこかのタイミングで個性なきカミと一体化した「先祖の国」へと榮転することになる。重要なのは、これが時間の経過による自然な移行ではなく、人為的な区切りを設けた儀礼的な移行であることだ。言い換えると、忘れられる（生前の記憶をもつ者がいなくなる）のを座して待つことなく、二度目の死を先取りするかたちで、先祖に昇格する儀礼として組み込んでいることである。これこそ、先人たちが行なってきた民俗的な歴史実践とはいえないだろうか。

*

さて、幕末から昭和の戦争まで、戦死者の魂を個性なきカミへと融合させる役割を果たしてきたのは靖国神社である。弔い上げを待つことなく、祖国のために命を捧げた「公の死者」は、いわば公的な先祖として社会制度のなかに位置づけられてきた。公的な先祖とは、家族単位の死者／先祖とは異なる、共同体単位の〈我々の死者〉である（大澤, 2024 参照）。

敗戦で帝国陸海軍が解体され、靖国神社が宗教法人となり、戦争の大義も否定されると、戦死者の魂は公的な先祖（我々の死者）としての資格を剥奪され、社会のなかで行き場を失い、宙吊りにされた。戦友会がなぜ昭和の戦後にあれほど多く生まれたのか。国家や社会から打ち捨てられた戦死者の魂を守ることができるのは「戦死者の生前の記憶をもつ者」のほかにはなかったからである。こうして戦死者の魂は戦友と遺族によって辛うじて守られてきた。そのあいだは個性あるホトケと

して「死者の国」に留め置かれ、個性なきカミとして「〈我々の死者〉の国」に移行する手前での待機状態が続くことになる。

1945年の死者の弔い上げとなる33回忌は1977年（戦後32年）だった。当時は戦後30年＝1975年よりも、33回忌＝1977年のほうが区切りの意識が強く働いたから、靖国神社への戦友会の団体参拝件数のピークもこの年に当たる（高橋, 2005: 237頁, 図表10）。通常仏式とされる33回忌のタイミングで神式の靖国神社に集まるといのは奇妙にも思えるが、宗派以前の民俗的な慣習と捉えるならば納得がいく。

ところが、1977年は戦死者の魂の処遇のうえでの区切りとはならなかった。何しろ戦死者たちの歿年齢は10代後半から20代、33回忌のときも戦友たちはまだ50代の働き盛りである。退職後、時間の余裕ができると戦友会活動はますます盛んになった。1989年の昭和天皇崩御＝昭和の終わりにおいても戦死者の魂の処遇は変わらず、60代から70代になる戦友たちはそのまま年齢を重ねた。

結局、戦死者たちは個性あるホトケのまま——個性なきカミへと融合する機会を逸したまま——戦友たちが肉体的限界を意識する2000年代まで来てしまった。戦友だけでは維持が困難になった戦友会は、解散したり、遺族（それも戦死者の生前の記憶をもたない世代）が支えたり、あるいは戦友でも遺族でもない第三者が引き継いだりしている。「非体験者が担う戦友会という謎」（前出）が出てきた所以である。

*

私たちは、戦死者に対してあくまで「個性あるホトケ」としての処遇を続けようとするのか、それともその先の「個性なきカミ」の可能性を構想するのか。

「長すぎた記憶の時代」とは、戦死者の生前の記憶をもつ者の減少に反比例して記憶の価値が高まった時代にほかならない。まさに『リメンバー・ミー』の世界観である。そこでは個性あるホトケの延命を図ることは、「死者の国」で暮らせる期間を延ばすことと同じく正義なのだ。それに抗うことは難しいかもしれない。しかし重要な手がかりが本書のなかにある。第I部「非体験者による存続の行方」に収録された塚原真梨佳「戦後七〇年の軍艦金剛会：『追憶』のためのノート」と角田療「なぜ統合は困難なのか：戦友会の固有性と組織間のつながり」において、戦死者の魂の新しい守り手として、現役／退職自衛官が参入してきたことが示されている。事実の指摘を超えて、どこまで踏み込んだ評価ができるかが、彼らの歴史実践の試金石となると思う。

冒頭で「戦死者において二度目の死はいつ訪れるか」と問うた。本書を読みながら考えたのは、戦死者における二度目の死を、座して待つことなく、能動的に呼び寄せることである。「忘れない」のその先に進む歴史実践のかたちをともに模索していきたい。

参考文献

- 大澤真幸（2024）『我々の死者と未来の他者』集英社インターナショナル。
 高橋三郎他（2005）『新装版 共同研究戦友会』インパクト出版会。
 柳田國男（1946＝2013）『先祖の話』角川文庫。